

8月12日 AM6:00 参加者10名、2台の車に乗り合わせ松本を出発。AM7:00 沢渡からタクシーで上高地へ向かう。天候は晴れ。新釜トンネルを抜け道路を巡ると、大正池一面に荘厳な姿を映して、穂高岳が青空高く聳えている。バスターミナル広場で待つ1名を加え、総勢11名となり準備を整えAM7:50 出発する。明神、徳沢と梓川左岸沿いの林道を行く。AM11:10 横尾に到着する。



大正池に姿を映し朝陽に輝く穂高岳



梓川左岸沿いの林道を行く



上空に筋雲が走る天候

横尾で昼食後 AM11:45 出発。上空に筋雲が走り、天候が変わることを知らせている。河原を30分程歩き、左手に豪快な屏風岩を仰ぎながら。PM1:00、沢が合流する本谷に到着。小休止後、急坂の岩道を1時間も登ると低木帯が広がり、残雪の雪斜面を蹴込みながら一歩、一歩登る。その前方に穂高岳の峰々が迫ってくる。PM2:45 涸沢ヒュッテに到着、泊する。夕食前、参加者展望テラスに陣取り、明日の登攀を案じながらひと時を楽しむ。



豪快な屏風岩を仰ぐ



残雪の雪斜面を一歩、一歩登る



穂高岳に囲まれた涸沢

8月13日夜半から雨が降り続く。AM6:45 全員雨具を着用して、北穂高岳山頂を目指し涸沢ヒュッテを出発。10分程登った涸沢小屋裏からは、いきなり急坂のガラ場を直登し、岩礫帯の枯れた草地をジギザグに1時間程登る。草地を抜けて高さ60m程の岩壁に取り付けられた鎖を頼りに登り切ると、さらに急峻な岩稜線が1時間程続く。

テント場を通り抜け、穂高岳主稜線の岩場に登り出て、北へトラバース気味に辿ると AM10:30 北穂高岳山頂3106mに到達する。「バンザイ！」全員笑顔で握手を交わし合う。山頂は霧雨が降り続き、視界が全く効かない。北穂高小屋のテラスで早めの昼食を摂る。



急峻な岩稜線を登る



チングルマ



ヨツバシオガマ



雨の北穂高山頂に登頂バンザイ！

AM11:30 北穂高小屋を出発。主稜線の急峻な岩尾根を進む。稜線西側の眼下には、「鳥も通わぬ滝谷」といわれる高度差 1000mの大障壁がそそり立っている。しかし視界は全く効かず、滝谷下方からの風も吹き続けている。岩陰には、ヨツバシオガマ、チシマギキョウの花々が風雨に打たれながらも堂々と咲いている。そのひたむきで可憐な姿に心打たれる。最低鞍部からは、落石に注意して岩壁を攀じり、涸沢槍を経て涸沢岳への最後の難関に挑む。



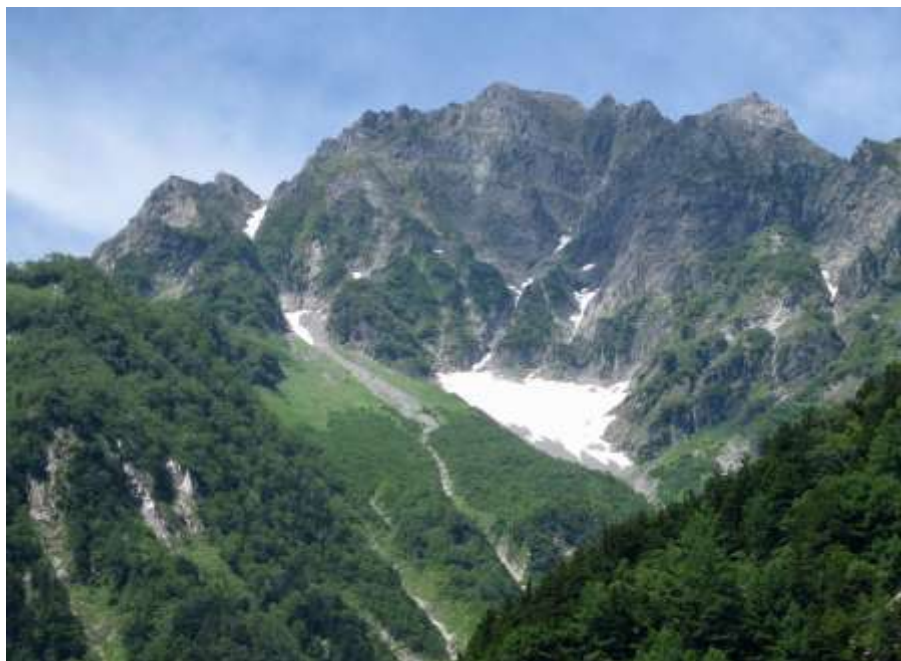
主稜線の急峻な岩尾根、左側は滝谷

涸沢岳への絶壁を攀じる参加者

風雨の涸沢岳 3110m山頂に登頂

しばらくの登攀の後、岩溝のクサリを頼りに、満杯の力を使って体を迫り上げると、涸沢岳山頂へ続くなだらかな稜線に登り出る。PM2:15 涸沢岳山頂 3110mに全員登頂する。「おめでとう！」皆、難関を乗り越えた安堵の笑顔が見れる。全員濡れながらPM2:50 穂高山荘に到着、泊する。一息ついた頃、燃えるストーブを囲み、今日の登攀の苦労をねぎらい酒杯を交し合う。

8月14日、夜半からの小屋に叩きつける猛烈な風雨の音で目を覚ます。暴風雨の奥穂高岳を見上げ、思案の末、吊り尾根から岳沢下山を断念し、AM6:30 穂高山荘から涸沢経由の下山を開始する。ザイテングラードの濡れた岩場を注意して下降し、AM8:00 涸沢小屋に到着。小休止後、テント場を一気に横切り、霧に煙る涸沢に別れを告げて、下山を急ぐ。AM11:00 ようやく雨の上がった横尾にたどり着く。



8/12 徳沢～横尾で見上げる、前穂高岳東壁の威容、上空に無数の筋雲が走る。

昼食後、身支度を整え出発。徳沢、明神を経て、PM2:45 上高地に到着。PM3:00 バスターミナル食堂で熱いコーヒーで一息つき。PM3:30 混雑の上高地からタクシーに乗り込み、沢渡から往路と同じに車に乗り合わせ、PM5:00 松本で最終解散とした。「悪天候の中、北ア屈指の難関ルートを踏破したことは、震えるような感動とともに大いなる自信となったことしょう。」

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則